

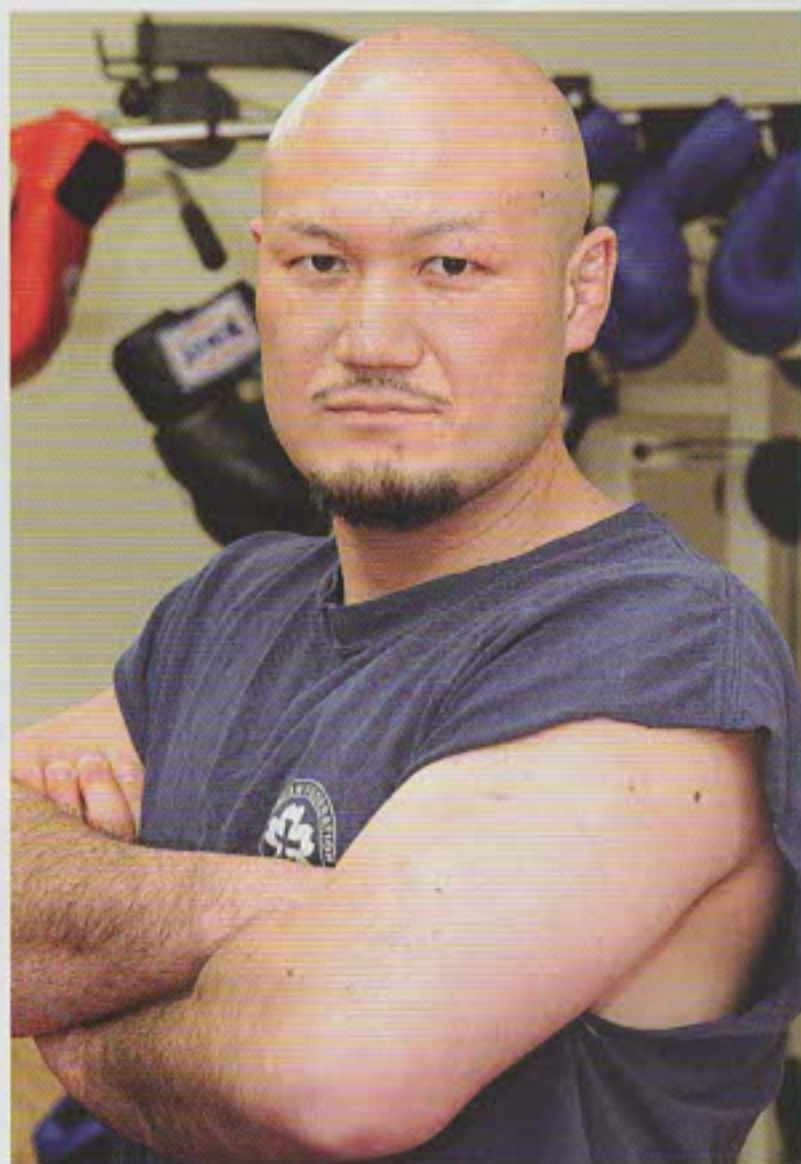
# 拳の履歴書

## 第三十六話

～「格闘家」という生き方～

## 格闘技の存在意義……佐藤堅一

関朝之



1 専門学校のクラスの仲間が次々に就職先を決めていく。全員の就職活動を早々に済ませてしまいたいのか、担任教師は「早く決めるよ」と俺を急がす。だから、キックボクサーになるとは一切口にせず、「なるべく早く就職を決めます」とだけ答えていた。

結局、最後の最後、俺だけが就職先が決まらなかった。いや、決めなかった。仕方なく「実はキックボクサーになりました」と担任教師に話した。すると、教師は血相を変え、俺に言い放った。「いいか、ああいう世界は華やかに見えるけれど、それは一握りの人間で、大部分が目の見えないで終わっていくんだ。そんな世界に飛び込むなどと考えず、しっかりとした就職先を探せ」と。

俺は咄嗟に言葉を切り返していた。「そんな世界だから、飛び込んでいくんですよ」と。

この専門学校の卒業生名簿には就職先一覧が載る。自動車関連の会社や並ぶその欄には、空手団体の名称も記された。そう、俺の「就職先」だ。

2 2008年5月13日。

西武池袋線ひばりヶ丘駅の改札口に元MA日本ライト級・Sライト級王者の井上哲（てつ）が現れた。2ヵ月ほど前、井上が主宰する小鉄塾というキックボクシングの同好会を取材させてもらった。その帰路、常設道場を持たない彼らに、出稽古という形で練習場所を提供している人物の話聞かせてもらった。「サトウケンイチと言って、1人500円で出稽古させてもらっているんです。実にいい奴なんですよ」と。

格闘技の専門ライターではない私に格闘家の知り合いは少ないが、幾人かの信頼の置ける人物と知己を得ていた。そのなかの1人が井上である。井上がナイスガイと認めるのなら、間違いはない。

そして、小鉄塾の出稽古が行われるこの日、私はその男の半生を聞かせてもらうため、井上に案内されて「士道館ひばりヶ丘道場」へと向かった。

数分歩くと駅前周辺の賑わいは途切れ、番地は練馬区から新座市に変わった。いつの間にか、東京都から埼玉県に入っていたらしい。なおも歩を進めると、閑

静な住宅街の一隅を照らす道場の灯りが見えてきた。その空間の主は、ユーモラスに、そしてホットに半生を語ってくれた。

3 佐藤堅一は、1971年、静岡県静岡市で産声をあげた。その3年後には妹が生まれ、両親を合わせた4人家族となる。佐藤の生家は駿河湾を臨む大浜海岸のそばにあり、幼少の頃より海辺で遊んでいたという。また、それ以前の幼子の頃から悪戯好きだったそう。

（「遊泳禁止」という看板が出ている深くて潮の流れが速い海で、毎日のように泳いでいました。それと、小さい頃、スパーの棚から卵を落として割ったり、祭りなどの人込みが多い所ではちよるちよるして迷子になったりした記憶があります」）

小学校の低学年のとき、父・良雅に連れられて地元の映画館に入った。スクリーンには、アメリカ生まれの中国人が主役を務めるアクション映画が映し出されていた。佐藤は、その俳優が醸し出す「強さ」に心を鷲掴みにされた。

（あれは、小学1年生か2年生のときでした。その迫力に、この人は凄いと恐怖さえ覚えました。以来、「俺は世界でいちばん強い男になるんだ」という夢を持ったんです。部屋はブルース・リーのポスターだらけになりました」）

憧れの念を抱く人物のような「強さ」を身に付けようと、佐藤は近所の空手道場に通い始めた。柔道をしてきた格闘技好きの良雅は、空手を始めた息子のために、庭に鉄骨を組んでサンドバックを吊るした。佐藤は見よう見まねで、自分の身長ほどあるその塊にパンチやキックをめり込ませた。しかし、通っていた道場の空手は型や基本稽古を主軸に据えた寸止め。サンドバックを叩く調子そのままに道場で相手をしようと、突きや蹴りがパンチやキックとなって相手に当たり、指導者から幾度か怒られた経験がある。

一方、小学校では勉強が好きなほうではなかった。かといって、体育だけが得





ブルース・リーに憧れた少年は、厳しい環境に身を置きキックボクサーになった

意というタイプでもない。それでも、明るい性格の児童の周辺は、常に笑いで溢れていた。下校後は、友人たちと海岸でテトラポットに基地をつくったり、工事現場の砂山に登ったりして遊んでいた。小学6年生で両親が離婚。佐藤は母親と妹と離れ、良雅と祖母・スミノの3人での生活を送るようになった。

「おばあちゃん子でした。普段、祖母は『堅ちゃん』と優しく接してくれましたが、叱るときは『堅ー』でした。靴は揃える・食事中はテレビを見ない・背筋は伸ばす・挨拶はしっかりとする……。あのときは煩わしいと思っていた祖母の言葉が、今になって生きています」

4

中学校の制服に袖を通すようになった佐藤は、迷うことなく柔道部に入部。並行して空手道場には、週に1回、通っていた。そんな格闘技に明け暮れた日々を重ねたのも、「強くなりたいたい」という思いが胸に満ちていたからだ。

「漠然と『強さ』を追い求めていたので、競技自体に憧れていたわけではありませんが。柔道も強いし、空手も強い。自分のなかでは、ブルース・リーが最強なので、一歩でも近付けるのなら、なんでもやろう、という気持ちでした。

リアルファイトの世界である程度の地位まで上り詰めると、アクション映画なんて演技の世界だよ、と普通は思うじゃないですか。でも、私の場合は一切、そうならない。むしろ、子供の頃より今のほうが、もっと凄くと思えます。ブルース・リーは永遠の憧れですね」



試合会場には、父・良雅も会場のどこからか応援していた

佐藤は地元の高校に進んだ。普通科・商業科も併設された学校だったが、自動車が好きだったので自動車工学科を選択した。中学校では小学校同様に学業の成績が芳しくなかったが、高校では急に勉強が目覚めた。

「通っていた高校は各中学校の不良が集まるようなところで、中学校では落ちこぼれだった自分が、少し勉強しただけですぐに成績が上位になってしまふ。さらに好きな自動車の専門的な教科も加わって、なおさら勉強が面白くなったんです」

佐藤は部活にも入らず、空手道場にも顔を出さず、ただただ勉強に勤しむ学園生活を送った。その結果、中学時代は下から数えたほうが早かった学業成績が、高校3年間は学年の首席をキープし続け

この時期の佐藤は身長が150センチくらいで体重が40キロ前半。決して体格に恵まれていたわけではなかった。

「中学3年の終わりで、やっと(身長が)160センチを超えたくらいでした。高校時代に伸びて、今は172センチで、体重が77キロです」

佐藤は、柔道の団体戦にレギュラーとして出場できずに3年間を過ごした。それでも、練習をさぼったことは1回もない。「やると決めたら徹底して取り組む」それが佐藤の信条だからだ。

\* \* \*

た。

「中学時代も興味のある教科、たとえば理科はトップクラスでした。好きなことには徹底して取り組むけれど、興味の無いものは、一切しないタイプなんです」

「強くなる」という目標からいささか道が逸れてしまった感があるが、ブルース・リーはいつも佐藤の胸の中にいた。しかし、漠然と格闘家になることを決めていたものの、具体的にどのような行動を起こしていいのかがわからないでいた。

そんな高校2年のとき、佐藤は格闘技の専門誌に載っていた著名なキックボクサーのインタビュー記事を目にした。そこには、強くなるための極意が書かれていた。記事を読み終えた佐藤はキックボクシングという格闘技こそ最強だと感じた。そして、このとき自身の目標が明確なものとして立ち現れてきた。俺はキックボクサーになるんだ、と。

5

高校3年生になると、クラスメイトたちがぼつりぼつりと就職先を決めていった。成績が優秀だった佐藤は、担任教師から大学への進学を勧められた。しかし、キックボクサーになることと大学進学は、佐藤のなかで同義語ではなかった。大学に進めば卒業時には22歳になってしまう……。それでも大学の空手部に入れば遠回りにならないのではないかと……。

このままキックボクシングの世界に身を投じてチャンピオンになれる可能性のほうが遥かに高い……。様々な想念を巡らせながら導き出した答えは、「習得した自動車の知識を生かすため2年制の専門学校に進み、自動車整備士の資格を取得したうえでキックボクサーになればいい」というものだった。

「専門学校を卒業しても20歳だし、自動車整備士という食いつばぐれのない資格も取得できますし……」

専門学校に進んだ佐藤は、自動車の整備に関する勉強を続けながら、50ccバイクのレースに夢中になった。

「専門学校では異端児でした。たとえば、学校側が取得させたい資格の試験でも、自分に意味がないものは受験しませんで

した。それと、どこかの自動車整備工場に体験入社をさせてもらったとき、決められた枚数でその感想を書くように言われたのですが、「レポート用紙10枚分の感想を感じる人もいるだろうし、1行しか感じない人もいるのではないかと。感想に文字数が決められるのはおかしい」というようなことを書いて、提出したことがありませんでした」

空手道場には通わなかったものの、佐藤は家でダンベルを持ち上げたり、サンドバックを叩いたりしてはしていた。格闘技から離れてはいたが、胸の中には「強くなりたいたい」という思いが引き続きいたのだ。

「当時、静岡県内にキックボクシングのジムがなかったため、専門学校を卒業してから上京することは決めていました。まず、寮があるジムを探しました。通いだと、雨が降っているから面倒くさいな、疲れているから行くのはやめようということになってしまふ。でも、寮の中に自分を投じてしまえば、否が応でも練習するじゃないですか」

佐藤は格闘技の専門誌で、キックボクシングや実戦空手などをさせてくれる士道館の「寮生募集」の広告を見付け、掲載されていた場所に履歴書を送付した。すぐに返事が来ると思っていた。しかし、数日が過ぎても連絡は来ない。おかしいな、と訝しく思い電話をかけると、受話



「士道館の魔神」は3階級でチャンピオンになった





海外でも積極的に戦った。その数だけ友情が残った

器に出た寮生らしき人物に「わかりました。上の者に伝えておきます」と告げられた。

こうして、佐藤は埼玉県所沢市にある士道館総本部に見学に行き、その寮生になることが決まった。

「専門学校では、静岡トヨタ・静岡日産などの就職先を生徒に斡旋してくれました。それで、卒業生名簿の就職先の欄に、それらの会社名が書かれるんです。それでも、稀に自分で就職口を見付ける人がいて、その場合は「自己就職」と書かれるんです。私も危うく「自己就職」と書かれるところだったんです。「俺は士道館という所に入るのだから、就職先には『士道館』と書け」と言っ、そう載せてもらいました。それを見た、他の生徒の親は「士道館って、なんだろうね?」とか言っていたそうです」

専門学校を卒業した佐藤は、5月に上京し、士道館に正式入門した。すでに大荷物を送り終えていたので、入門当日は50ccバイクに跨り、静岡市から所沢市を目指した。早朝の5時に出発し、道場に到着したのは13時半。実に約8時間半の移動だった。

佐藤が道場に行くと、3人いた寮生の中の1人が告げた。

「今日の夜から練習をするぞ。長旅で疲れただろうから、それまで休んでおけよ」

佐藤は与えられた個室で仮眠をとっ

た。夕刻になると「練習を始めるぞ」という先輩の声がした。入門当日であり、長旅の疲れも考慮され、軽めの練習で済むと思っていた。けれども、違った。

先輩が佐藤に尋ねてきた。「おまえ、スクワットを何回できる?」「はい。1000〜2000回はできます」「よし。じゃあ、スクワット2000回やるぞ」

2000回の屈伸運動を終えると、間髪入れず、サンドバック相手に突きや蹴りの練習を行うよう命じられた。

息も絶え絶えになりながらサンドバックを打ち続ける佐藤に、先輩は容赦なく告げた。

「よし、次は組手だ。さあ、打ってこい!」

佐藤が空手をするのは数年振りだ。しかも、実戦空手の経験は皆無である。

「参った。「打ってこい」と言われても、どうすりゃいいんだ……。」

佐藤が戸惑いを覚えていると、向き合っていた先輩が、声を荒げた。「そっちが打ってこないなら、こっちから行くぞ!」

「これは半端じゃない。こんなことが毎日続くのかと、不安になりました。私が寮にいた10年間で、40〜50人の寮生たちが夜逃げしています。めちゃめちゃ厳しいですから……。それでも、練習が終わ



総合格闘技でも多くの外国人選手と戦った

ると充実感があります。たしかに参った部分はあったのですが、やっぱり「強くなる」という目標を叶えるためには、それなりのことをしなくてはならないと思います」

寮生であった佐藤は、道場に勤務する内弟子とは異なり、日中、仕事に出かけて生活費を稼ぐ。

「アルバイトは、建築現場などでの力仕事が多かったですね。どうせ働くのなら、それも練習だと思える力仕事を選んでいましたから……。そう考えれば、仕事も頑張れるじゃないですか。そういうつもりで一生懸命に働いていると、周りから「よく君は働くね。うちに就職しないか」と、何度も誘われました」

「士道館ひばりヶ丘道場」で佐藤の話を聞いて1時間近く経っただろうか。時計の針が20時を過ぎると、佐藤の道場生や井上の弟子たちが、ぼつりぼつりと集まっていた。

井上の弟子たちは佐藤に500円硬貨を渡して練習を始める。面白いのは、その誰もが500円硬貨を必ず持参していることだ。1000円玉5枚の者も、1000円札を出して釣りを要求する者も皆無である。換言すれば、少なくとも、この道場での出稽古がある当日、ないしは前日から、小鉄塾の面々は1枚の500円硬貨を意識して準備しているということだ。私には、そんな一枚のコインが、出稽古の空間を格別の条件で提供してくれる者への、彼らなりの礼節の証のように思えた。

佐藤の話は、入門からデビュー戦の話に差し掛かっていく。「入門して1カ月のときに、添野(義二)館長から「2カ月後の試合に出る。パンタムで試合を組むから、減量しろ」と言われました。「押し忍! わかりました」と答えたものの、私の身長でパンタム級まで落とすのは、ものすごくきついわけです。方法も知らないまま減量を始めました。とりあえず飯は食わなければまずいと、食べていたのですが、パンタム級の体重まで落ちない。これは参ったと、1日、納豆1パックだけにして弁当屋の

配達のアムバイトに行き、道場で練習をして55キロくらいまで無理やり落としました。でも、よく貧血を起こして、ついに骨がすかすかになってしまったのか、足を疲労骨折して、その試合は流れてしまいました」

その後、入門から半年後にフェザー級の試合に出場することになりました。会場は後楽園ホール。パンタムに比べて、減量は楽じゃないですか。当時、建築現場でのアルバイトの残業が多かったので、練習時間が十分にとれないままデビュー戦を迎えました。簡単に勝てるだろうと、キックをなめていたんです。試合は最初の1分でスタミナを使い切ってへ口へ口になってしまっ……。相手もスタミナがなくなっちゃったようで、2人して第1ラウンドでふらふらでした。ようやく第1ラウンドが終わって、残りの2ラウンドをどう持たせようかと思っ……。

第2ラウンドで、相手が繰り出してきたヒジがヒットして、額がざっくり切れてTKO負けしてしまいました。その日、格闘技はスタミナがなければいけないと反省し、以来、ロードワークでもジムの練習でも、スタミナ養成に力を入れました。デビュー戦のスタミナ不足がトラウマになっていましたが、試合を重ねていくうちに周りから「スタミナがあるね」と言われるようになって、自信が出てきたんです。

寮生になると「寮に入ったからには3年間、頑張れ!」と館長から言われて、3年が過ぎるのを指折り数えて待って、満を持して「館長、寮生になって3年経ちますので、このへんで寮を出ようと思えます」と切り出した。「駄目だよ、まだ出ちゃ。今が強くなるかならないかの境目だから……。」と簡単に言われました。シヨックでしたが、今から思えば館長がそう言ってくださって、本当によかったと思っ……。あのとき寮を出ていたら駄目だったでしょうね。それで5年が経ち、6年が経ち……。30歳のとき結婚を機に寮を出してもらいました」

こうして佐藤からみっちり話を聞け





井上との戦いを越えた友情は、佐藤の道場を舞台に続いている

るのも、自称「日本一のミット持ち」の井上が小鉄塾の稽古を行いながら、道場の会員の指導も買って出てくれていたからだった。

佐藤の話は、チャンピオンになる頃に入っていく。

「初めてのタイトルマッチは、山崎通明選手との王座決定戦でした。その試合は、どっち付かずのまま第5ラウンドまで終わり、ドローでした。王座決定戦ですの、延長ラウンドを行い、1人のジャッジが山崎選手で、他の2人がドローでした。1対0ということで、本来はドローなのですが、どちらか決定しなくてはいけないので、私はベルトを取れませんでした」

ホームレス、政治家、医師、俳優、作家、職人、市井の人々、そして格闘家……。職業柄、私は様々な人と会って、いろいろな話を聞かせてもらってきた。そんななかで、いつまでもその生き方が胸の中に鉛錐（えんすい）のようにあり続ける人物がいた。そんな取材対象者が、井上哲であり、山崎通明であった。井上や山崎と対戦したことのある佐藤の話に、私はますます引き込まれていった。

「再び山崎選手に挑戦して、今度は判定で勝ってライト級のチャンピオンになりました。その試合の内容に納得いかなかったのですが、チャンピオンになるまでは実家に戻らないと決めていたので、ベルトを持って5年振りに静岡へ帰りました。」

「防衛をした後、新設されたスーパーライト級の初代王者になり、2回、防衛したんです。そのうちの1回が、また井上さんなんですよ。しつこく狙ってきますよね。それもドローでした。体重がさらにきつくなつてウェルター級に上げて、その階級でもチャンピオンになれたんです」

その後、佐藤はサムライルール（1st 1stステージはキックボクシングルール、2ndステージはグラップリングルール、3rdステージはリング内、オープンフィンガーグローブ着用）5分2ラウンドに出場したり、修斗やバンクラスの試合にも出場したりした。

「キックボクサーは寝たら終わりと言われるのが嫌で、総合格闘技も本格的にするようになりまして。総合格闘技をずっとやっていこうという気持ちもあったのですが、この道場ができて、指導を任せてもらおうようになりました。自分の練習だけをしていけばいいという環境ではなくなり、プロとしてベストのコンディションをつくれぬのなら……と、32歳で引退したんです」

出生から聞かせてもらった佐藤の半生はユーモラスな雰囲気のまま、36歳である現在に到着した。私は佐藤に「今後の夢」を聞こうとした。すると、その質問をぶつける前に、三枚目の口調を二枚目のトーンに翻し、佐藤は語り始めた。

「格闘技の世界は、本当に素晴らしいと思っています。私が、これほどまでに格闘技にハマるのは理由があるんです。つまり、格闘技の存在意義を自分なりに発見したんです。ただリングの上で戦って、どっちが強い・弱いかを決めるだけ。格闘技ではありません。格闘技には、ものすごく奥深い部分があって、民族・言葉・文化・宗教など、あらゆるものを超え、ハートとハートを通じ合わせることでできるんです。そのために格闘技は存在しているんです。」

士道館は世界50数カ国に支部があり、日本で強くなると世界中に行かせてもらえます。私もアメリカ・イギリス・ドイツ・フランス・ルーマニア・スイス・ベルギーなど、いろいろな国で試合をしてきました。そういうなかで、1回戦った人間、あるいはその試合に携わってくれた人間と試合後に交わした握手は、何年経っても忘れません。当然、国が違えば、なかなか会えませんが、なんのコンタクトもなく何年振りかで会っても、「おー、サトー」とまったく変わることのない関係ができます。これは、すごいことです。夢があるんですよ。使命と言い換えてもいいのですが……。それは、格闘技を通じて、世界平和を達成することです。国を超え、言葉を超え、文化を超え、宗教を超えるもの。それは格闘技しかありません。もちろん、仲良くなる前には、相手を殺すくらいの気持ちで、1回、リングで闘うわけです。そこで互いに出し切るからこそ、通じ合えるものがある。相手も努力してリングまで辿り着いて、全力を出し切る。その痛みや苦しみが理解し合えるから、互いを尊敬もできる。そうならなければ、少なくとも私には格闘技をやる意味がない。チャンピオンになったとか、名前を売ったとか、そんなのは2の次で、世界中に友達を作ることができたのが財産です」

佐藤の話が進むごとに、その手元の500円玉は増えていき、道場内の練習が熱気を帯びる。

「前蹴り。バシッと来い！」「さっきよりも、よくなっているぞー！」そんな井上の声が道場内に響いている。

佐藤は、道場内のリングで指導をしている。「かつてのライバル」に視線を泳がせた。

「井上さんとは4回も戦っているんです。4回！井上さんは、今、練馬区内の公共体育館を回って練習しています。この道場と距離的にも近いし、自分とは4回も試合をした仲なので、週に1回とか2回とか、出稽古に来てもらっています。公共の体育館では、設備が十分ではないんです。だから「道場で練習をさせてもらえないか」という話を去年の年末にももらったときは、本当に嬉しかったですね。「こちらこそ、来てください」という気持ちでした。井上さんはムエタイスタイルでした。だから、出稽古に来てもら



強い選手を育て、自身と同じように海外の選手と戦わせ、そして仲良くさせるのが佐藤の夢の1つだ

井上さんの技術を吸収できるんです。初めは「お金なんかいらぬ」と言っていたのですが……。私が井上さんの指導方法を学ばせてもらっているのですからね」

佐藤と井上に挨拶をして、私は「士道館ひばりヶ丘道場」を後にした。そして、佐藤と井上、山崎と佐藤、あるいは井上と山崎、彼らが同じリングで戦っている姿を見たかったな、とぼんやりと思いつつ、駅に向かって歩いた。

埼玉県から東京都へ戻ったか否かの地点で、いや待てよ、と思いついた。私は、今しがた彼らの試合に匹敵する光景を目の当たりにしていたのかもしれない、と。かつて拳を交え、今後は戦うことのない佐藤と井上。そこには、第三者が介在できない友情が成立していた。私は彼らの「格闘技」を観戦することはできなかつたが、「格闘技の存在意義」を見せてもらったのだ。

今日出会ったナイスガイもまた、井上や山崎と同じように、私の胸の中に鉛錐を下ろすに違いない。 (文中敬称略)